

19世紀前半のアメリカろう教育における手話法(2)

上野 益雄

はじめに

アメリカのろう教育の歴史において、1863年からマサチューセッツ州で、口話法によって指導することを標榜したろう学校の設立運動が起こってくる。以後、次第に、口話法は、全国的に広まっていくことになる。この1863年以前は、アメリカろう教育界にあっては、教育方法に関する議論は、もっぱら手話に関してのものが多かった¹⁾。従って、1863年以前と以後とに分け、前者の1863年以前を19世紀前半と考えることにする。

アメリカろう教育の初期における教育方法では、ド・レベ(C. M. de l'Épée)、シカール(R. A. C. Sicard)を受けついで方法的サイン(Methodical Signs)に重点をおいた指導法から、T. H. ガッローデット(T. H. Gallaudet)、C. ストーン(C. Stone)などに見られるとおり、自然的サイン(Natural Signs)に重点をおく考え方となっていたが²⁾、1850年代に入って、ろう教育者たちの間に、自然的サインの過度の使用に対する批判が高まってきた。それは、ろう教育の目的の一つは、書きことばを習得することにある³⁾、ということから、自然的サインを用いる方法に重点をおいていたのでは、書きことばに習熟しない、という悩みがあったからである。と同時に、方法的サインというものに対しても、その濫用が反省されていた。次のレイ(L. Ray)のことばも、どのようなものであれサイン一般について述べているものである。「…サインが、あまりに多く、あまりに長く続けて用いられ、指文字や書記言語が使われないということは、アメリカろう教育の実際上の誤りである」⁴⁾

当時、初等教育への関心の高まりの中で、殊に、東部を中心にこの教育運動の広まりつつあった中で、ろう教育においても、そうした外部の社会情勢の影響を受けないわけにはいかなかった。すなわち、従来の「心に観念を植えつけ、神の存在を知らしめる」⁵⁾という道徳的・宗教的教育の主眼から、「社会の一員として必要な知識を身につける」⁶⁾という教育目標の変化を反映している

ともいえる。1860年代に入って起こった、口話法によるろう学校設立運動は、このことを最もよく示している。とはいえ、19世紀前半のろう教育界にあってのコンセンサスは、次のようであった。すなわち、「……すべてろう教育にたずさわるものは、サインが、ろう啞教育において、ある重要な役割をもつことを知っている」⁷⁾ということであった。一方、先に述べた如く、ろう教育の目的の一つである書きことばの習得のため、手話は、どのような形で、どのような位置づけをもって用いるか、という点で意見が分れていた。このことについて見る前に、次の、当時のろう教育者たちに共通する前提をおさえておく必要がある。それは、以下のことである。

- ① サインというものを、思考のにない手として必要としたこと。(初期の口話法においては、このことは否定されなかった。手話排斥は別の理由である)
- ② 社会との交流は、文字言語によって可能としたこと。

当時の問題は、1960年代から関心がもたれるようになった手話研究、特に、ろう教育における伝統的手話とマニュアル・システム(Manual System)の問題として現われており、またバイリンガリズム(Bilingualism)の問題とも関連をもっている。

本稿では、ケンタッキーろう学校長として指導的立場にあったJ. A. ヤコブス(J. A. Jacobs)と、同じく指導的立場にあったニューヨークろう学校長のH. P. ピート(H. P. Peet)について、「言語指導においてサインをどう考えていたか」ということを、二人を対比させて考えることにする。

1. 用語の多義性—方法的サインについて—

シカールが、ド・レベの方法を受けついでさらに発展させた方法的サインは、実際的ではなく、あまりに理論的で、複雑なものであるとして、フランスにおいても、アメリカにおいても、必ずしも評価は高くなく、次第に退けられ、変容されていった。ストーンが反対したと同

じように、当時のアメリカン・アナリスの編集者であり、折衷主義をとるレイも、「方法的サインは、観念や物を表示せず、語 (Words) を表示するものであり、……サインは、語の正確な意味内容を伝えるものでなくてはならない」⁹⁾とやっている。しかしこの方法的サインという用語においても、人によってそれぞれ異った意味で用いられていた。

L. ウェルド (L. Weld), H. P. ピートなど、サインの種類について論述してあるが⁹⁾、人によって用語の使われ方が明確でなく、定義されずに使われていたため、必ずしも議論がうまくかみ合わなかった。

J. ヤコブスは、彼自身の用語の意味するところを明確に定義しながら、方法的サインについての多義性を1853年の論文の中で述べている¹⁰⁾。

M. ウェルドは「方法的サインは、何ら変化を許さない単純な自然的サイン (Simple Natural Signs) であり、語を教える適用に際しては、本質的には、すべての状況下で同じように作られるべきである」¹¹⁾「それは、自然に基礎をおき、良識判断をそなえた人の教養のもとで、正しく作られ、方法化されるべきものと明確に理解されるべきである」¹²⁾と述べている。同じ方法的サインでも、ストーンやレイの場合と異なり、方法的サインをもっと柔軟なものに考えていた。ストーンは、「方法的サインは、語を表示するもので、観念を表わしてはいない」と述べ、「方法的サインは、それが表示している特定の語によってのみ正しく翻訳される。この特有な点で、自然的サインといわれているものと基本的に区別される。

(自然的サインは、一般観念を表わすか、あるいは、多くの語の意味が一しょになっている)」「方法的サインは、語の意味を明確に示さないし、説明をもしない。単に、それは語そのものを表示し、想起させるものである」¹³⁾とやっている。ストーンが「方法的サインは、語を想起させるように作られたもので、語の意味を説明しない」というのに対し H. P. ピートは「方法的サインも自然的サインも、しばしば同一のものである」¹⁴⁾といており対照的である。

W. ターナー (W. Turner) は、「自然的サインも、任意的サイン (Arbitrary Signs) も、指導の際に用いられ、文章の語順に並べられる時、それらの語の文法的変化、関係を表わすサインと結びつけられると、方法的サイン、あるいは組織的サイン (Systematic Signs) といわれるものになる」¹⁵⁾と述べている。

以上のように、用語の意味するところが明確に規定されておらず、意見の相違も論点も必ずしも明らかではな

かった。夫々が各自の頭の中にあるものに方法的サインとか自然的サインとかの名称をつけていた感がある。

では、J. A. ヤコブスは、以上のような状況をふまえて、自分の立場をどのように明確にしているであろうか。次に彼の言語指導の方法と理論とをみることにする。

2. J. A. ヤコブスの方法

1853年の彼の論文¹⁶⁾では、彼は自然的サインと方法的サインとを定義し、ついで1855年の論文¹⁷⁾で会話的サイン、一般的サインという用語に変えている。

・自然的サイン：⇨会話的サイン (Colloquial Signs), ろう啞者の心に観念が生ずるその順序で用いられるサインである。しかし、そのうちのあるものは、慣習的 (Conventional) なものもあり、人為的 (Artificial) なものもある。

・方法的サイン：⇨一般的サイン (General Signs) 書きことばの順序に従ったサインで、必要な文法的シンボルと変化とを伴うものである。それらのサインのほとんどは、自然的なものである。

ヤコブスは、サインそのもので分けてはいない。書きことばの語順に従うか従わないかが大切であり、サインは、必ず観念を表わすものでなくてはならなかった。

観念を伝えるためには、自然的サインが適切であり、それ故、道徳教育、宗教教育では自然的サインの方が書きことばより伝え易いものであるが、ろう教育の目的が、書きことばの習得にあるところでは、「自然的サインは不適切で、その自然的サインが指導に使われるなら、書きことばによる思考の妨げとなる。自然的サインを用い、ついで書きことばを教えるということは、ろう啞にとって非常に不確かさを増すことになる」¹⁸⁾以上のように彼は考えた。そして、外国語学習の場合、その国の言語による思考を習慣づけることが必要であるのと同じように、ろう啞に言語を習得させる場合も、英語そのもので考えさせることが必要であるとした。「われわれの教育の目的が、観念を伝えるため書きことばを習得させることにあるとすれば、自然のサインを用いることは、英語の語順と異なるので、教育手段としては正しくない、自然のサイン、パントマイムは不必要であり、害となる」¹⁹⁾と述べている。自然のサイン、つまりヤコブスのいうろう啞者の観念が起こる順序のまま作られるサイン、いいかえれば会話的サイン、(現在の用語でいえば伝統的手話にあたるであろう) は使うべきではない、では何が必要だというのであろうか。彼は、書きことばを表現して伝

えるための道具として、方法的サイン、彼のいう一般的サインというものを提唱する。すなわち、「書きことばの順序に従った、自然で、意味のあるサインを用いる」というのである。この命題は、彼の主張の中を一貫して流れており、くり返し言われているものである。彼の一般的サイン（方法的サイン）の特徴は、ストーンやレイの述べている方法的サインとは異なっていることに注意せねばならない。彼は、サインそのもので自然的サイン、方法的サインに分けない。彼の区別では、前者は、会話に用いられる場合のサインであり、自然的であれ、慣習的であれ、任意的であれ、ろう啞者が自然に用いている順序で現われてくるものであり、後者は、一般的サインとして、文の語順どおりに並べられたサインで、しかもそのサインは語のみを表示するのではなく、観念を表示するものであった。「あまりに多くのサインが用いられすぎる」という当時のろう教育方法に対する警告は、ある人にとっては方法的サインのことであり、別の人の場合には自然的サインのことであった。ヤコブスの場合にも、書きことばに一致しないろう啞者の会話に用いられるような場合をさすと同時に、従来の方法的サインの中で不適切な、無意味なサインの濫用をもさしていた。

まず、彼の方法をみることにする。彼の方法は、ピートもいうようにそれ程目新しいものでも、特徴的なものでもない。従ってピートにいわせると、理論はひどいものであるが、実践はそれほど悪くはない、ということになる。ヤコブス自身も、まだ自分の理論を十分に実践に移す方法は、わからない²¹⁾と述べている。彼は、書きことばの指導を次のように順序づけた²²⁾²³⁾。

- 1) アルファベットを学び、それから目で見える具体物の語いを学ぶ、
- 2) 次に形容詞が、先に学んだ名詞に結びつけられる。
例えば、*A large dog* とか *A black horse* とか、英語の語順に従ったままでサインをする（ろう啞者の自然の思考の流れでは、*dog large, horse black* となってしまう。）
- 3) この形容詞と名詞を結びつけることを学んだならば、指で綴り、スレートに書くことを学ぶ。
- 4) 同じような形容詞と名詞の組み合わせがいろいろ示され、練習がなされる。
- 5) ついで句や文に入る、それぞれ方法的サインによって示される。例えば *I sit on a chair* など、次に指文字でつづり、最後に文を書いて覚える。
- 6) 指文字でくり返すことにより、文の理解ができ

るようにする。生徒が進歩するにつれて、以前に教えられた語は、サインで示す必要がなくなる。もし各文をろう啞者の自然の pantomime の順序で示すなら、例えば *Floor on walk I.* というような順序となり、書きことばは正しく習得できなくなる。

彼は、もし文や句の構造が、困難で、よく理解できないときのみ、最後の手段として会話的サインを用いる。としている。それ以外は一般的サイン、つまり語順に従ったサインを用いることが必要であった。

ろう啞者が作文をするとき、支離滅裂な文章となる。しかし彼の心の中は支離滅裂ではないのである²⁴⁾。ろう啞者の自然的サインで示される通りの観念を、書きことばの語順の通りになおす努力は非常に大きいものである。ストーンは、「ろう啞者自身のことば (vernacular) の特質は、ろう教育でのことばの進歩を妨げるものである。このことばは、観念の言語であって、語や文の言語ではない……ろう啞者は、正しい文法的形で考えねばならず、そうしなくては、文章が、思考の順序に従ってしまふ」²⁵⁾と述べている。ヤコブスも同じく、ろう啞者の心の中で書きことばの語順で配列されるようにさせねばならないと考え、そのためにサインを語順で配列して示すことを考えた。

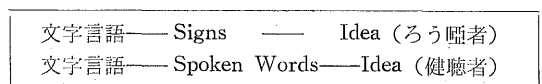
3. ヤコブスの理論

・観念を表わすものとしてのサイン

ヤコブスのサインについての考え方は、独得なものである。ろう啞者への言語指導にはサインは欠かせないものであり、しかもそのサインは、書きことばの語順に合ったものであり、しかも観念を表わす。意味のあるサインでなくてはならなかった。

以上のことを考えると、ストーンが方法的サインに反対し、自然的サインを重視したことと比較するとおもしろい。サインがろう啞者の観念を表わすものであり、ろう啞者にとって欠かせないものである点では両者は似ていたが、ヤコブスは、ストーンとはちがってある点では方法的サインに賛成であった。それは英語の語順に従う、という点である。H. P. ピートや、I. R. バーネット (J. R. Burnet) にあっては、方法的サインの利用をある程度認めていた。ヤコブスによれば、サインは観念を伝えるために必要なものであり、健聴者の場合の音声言語に相当するものであった²⁶⁾。

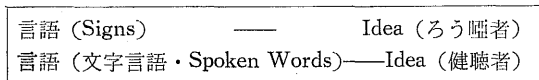
図 1 ヤコブスの言語と観念の関係を示す図



ヤコブスは、サイン自体からみて、方法的サインと自然的サインとの区別をしていない。そしてもしサインが観念を表わすものでない場合は、そのサインを退けた。

後に述べるように、H. P. ピートのいう「サインと語との関係は、異った言語での語と語との関係に等しい」ということに承服できなかった。ピートの場合を図式に示すと次のようになる。

図 2 ピートの言語と観念の関係を示す図



ヤコブスにとってのサインは、意味のある (Significant) ジェスチャーであり、ろう啞者の観念のにない手運び手であって、サインと語は同義語 (Synonym) ではないとした。彼は、文字言語だけでは、ろう啞者は言語を習得できない、(勿論、具体物があって簡単なイメージが生じる場合を除いてであるが) という立場をとっていた。例えば、g-o-o-d という文字は、意味のあるサインによってその意味が伝えられ、文字とサインとの間に関係がつけられる。そのため、ろう啞者がサインを忘れるときは語の意味は失われる²⁹⁾ というのである。彼は、文字言語とサインとの必然的、分離できない結合を強調した。ヤコブスの場合、図 1 で示されるように、音声は、それ自身観念ではないが、思考のにない手であり、文字言語はその表示物である。観念は、音声のことばによって伝えられる。同様に、サインは、ろう啞者にとっては音声に代わる必要な思考のにない手であり、文字言語はその表示物である。観念は、サインによって伝えられるというのであった。ヤコブスは、文字言語の一つ一つをサインで表わすことを目指した。その場合、同じ綴りの語でも意味が異なる場合は、異ったサインを用いるべきだとした。なぜなら、ろう啞者の思考は、われわれが音声の話しことばで思考するように、サインで思考するからであった。ヤコブスの理論の背景には、ロック (J. Lock)、ブラウン (Th. Brown) 流の概念論²⁹⁾ の影響がみられると思われる。

・ヤコブスの一般的サイン。

ヤコブスは、自然的サインに代えて会話的サインという用語を用い、方法的サインに代えて一般的サインという用語を用いたことはすでに述べた。そこでは、サインそのものについて、自然的サインも方法的サインも区別していない。サインは、ろう啞者にとっての観念のにない手であり、観念と書きことばのなかだちをなしており、健聴者にとって音声のことばに見合うものである。

それゆえ、ヤコブスにとっては、すべてのサインが、意味のあるサインでなくてはならなかった。その点で、従来、方法的サインといわれているものの中で、意味を正しく表わさないものが、彼にとって問題であった。方法的サインがあまりに形式的、機械的になっていることについての反対もあり、例えばストーンは、「must という語は、慣習的な、任意的なサインで示されるが、これは決して方法的サインではない。これは、義務とか責任とかの一般観念を表わすものである」³⁰⁾と述べ、慣習的、任意的なサインであっても、サインとして適切なものがあることを示している。ヤコブスも、サインの考え方についてはストーンと通ずるところがあり、例をいくつかあげている。ヤコブスが不適当とする方法的サインの濫用とはどんなものであったか次にいくつかをあげよう。

シカールの弟子が教室で書きとりの際に用いていた一例をあげてみる³¹⁾。それは roasted chestnuts (焼いたくり) という語の書き取りをさせた際、その“焼きぐり”を教室へもってきて生徒たちにその名前を聞いたところ誰も「知らない」ということであつた。そして、教師が「君たちは、もうその名前を書いたのだよ」と言ったとき、生徒たちはおどろいていた、というものである。つまり教師は roasted veal (焼き肉) のときの方法的サインを roasted chestnuts のときを用いて、chestnuts を申さしてしまったのであつた。

もう一例は、The cat is a domestic animal. という文章で、domestic の方法的サインで lacky とか waiter (従者) のサインで表すことであつた。また burn up のときの burn を、熱いストーヴから急に手をはなすサインで示し、up は上方の意味で示されるのであれば、意味はさっぱり通じないことになる。このようにヤコブスは、誤ったサインの濫用を認めなかった。彼は、意味のあるサインを語順にあわせて使うことを提唱した。彼にあっては、方法的サインという用語は放棄され、サインはすべて単に自然的サインのことを示しており、それが拡大され、組織化されて、書きことばの配列と慣用句に一致したものとなることをねらつた。故に、彼は、ある語に対して特定のきまつたサインが固定化していることに反対した。語は、それぞれの状況で意味が変わる場合があり、サインが変わらないのは不自然と考えたからであつた³²⁾。ストーンのあげた例の Trees bear fruit の場合の bear は yield とか produce とかのサインにすべきであり、we bear pain, bear a burden などでは別のサインとなる。もしその語が、語根やその語の一般的意味からそれるならば、サインもそれに従って変わる

べきだとした。語のみを表示するサインでなく、語と観念が分離しがたく連結したサインを使用すべきであるとした。

ヤコブスは、あくまでろう啞者に対してのサインの重要性を強調した。それは、ろう啞者は、書記言語をみるだけでは、観念は心の中に起らず、教育もできないという考えであった。聴者が「心の音(sound in mind)」を失わないのと同じように、ろう啞者はどうして「心のサイン(signs in mind)」を失うことがあるのか。教育されたろう啞は、書きことばをみるとき、自然にサインが心の中に呼びさまされるものである、と考えた。この点についてピートもバーネットも意見を異にしていた。ピートは、ろう啞者に対して、自然的サインを用いて物事を説明し、書きことばで表わされた意味内容が理解されれば、書きことばそのものによって、教育しうるし、ろう啞者は、書きことばに習熟しうると考えていた。従って、ヤコブスのように、すべてを方法的サイン、つまり彼の一般的サインで示さねばならないというには、二重手間であり、不必要なことだと考えた。ヤコブスにとっては、一般的サインは、欠かせず、ピートやバーネットらが書記言語そのものでろう啞者は、知識が得られるということとは意見を異にしていた。

一般語(General Words)が、聴者にとって必要な如く、一般的サイン(General Signs)なしでは、教育が進められなかった。man, horse, house, tree, などの一般語、さらにより上位の animal, being, weather color, condition といったような一般観念を表わす多くの語、名詞のほか動詞、形容詞、など類概念を生徒たちに伝えるために、意味のあるサインを書きことばと結びつけることによって、はっきりした観念を心の中にうえつけなくてはならないとしている。しかし彼は、このようなサインを、どのようにして作り出していくか困っていると白状している³⁸⁾。

4. H. P. ピートの反論

J. A. ヤコブス, J. R. バーネット, H. P. ピートすべて3人とも、書きことばがろう啞者にとって習得すべきことである、という点では一致していた。バーネットは、ヤコブスについて、ハイニッケの考え方と同様、古いものである³⁴⁾と述べている。つまり、ハイニッケが音声語を本質的なものと考えたのと同じく、ヤコブスがサインを欠かせないものと考えたことをさしている。ここではバーネットについては扱わないが、ピートの考え方について述べてみよう。

ピートは、「語はサインの表示物ではなく、観念の表示物となりうる」として、ヤコブスのいう「ろう啞者が物を表わすために採用したサインを、書きことばと結びつけるのをやめる時、彼は、その語の意味を知ることをやめる。それは、月が輝くのをやめるとき、夜は暗くなるのと同じように明白な事実である」³⁵⁾という主張に反対する。ろう啞者が物事を直接書きことばで、知識を得ることができる。その助けとして自然的サインが用いられるとした。ろう啞者は、この会話に用いられるサインで教えられていても、抽象的観念の直接の記号として、語を用いることを知っている。どんな語でも、そのろう啞者の知的発達の程度によって、パントマイムによってもその語を説明すれば、感覚されるものであれ、行動であれ、もしくは、色、時、経験、希望などという抽象語であっても、差異なく、利用でき、生徒がその後を表わす簡単なサインがないときは、彼は、記号として与えられた語を用いることができる³⁶⁾、といっている。

ろう啞者は、語や句を、観念の直接のサインつまり会話的サインやパントマイムによって学ぶのではなく、そのように説明された語として学びうける。さらに、一度使ったサインを忘れてしまっても、一方でそれに相当する語は忘れずに保持している。これはヤコブスのいう事実と反するといっている。ピートは、語とサインの関係は、図2に示したように基本的には、異った言語の間の相当する語の関係と同じだとした³⁷⁾。

ピートは「何千何万という語のためのサインを作り出すための非常な学力を費いやす必要があろうか」³⁸⁾と述べ、ヤコブスの言っている理論は、非常に単純なものであり、実践にうつすには無限の労力が必要であるといっている。

ピートは、方法的サインについて次のように指導の中で考えていた³⁹⁾。

「教育の初期の段階では、方法的サインは、利益をもって使用されうる。しかし生徒が、言語を理解することができた段階以後には、この方法的サインは使われない。教育の初期の段階の目的は、言語の構造の法則を教えることである。生徒が、彼に伝えられた観念を理解したところでは、その後は、自然的サインを通して、聴児に伝えると同じように人間の知識のいろいろな部分の情報を、心の中へ注ぎ込むのである」このようにピートは、ある段階に達するまでは、方法的サインが必要であり、言語の構文をしっかりと覚えるためのものであり、その後の知識の注入では自然的サインを大いに活用するという考えであった。

5. ヤコブとピートの指導理論の位置づけ

今から130年も以前の、しかも教育の対象となった生徒も、授業形態も現在と異なっていた当時の方法を考えてみる時、すぐにそのまま現在の問題との比較において考えることは、必ずしも適切ではない。しかし1960年代から、手語についての関心が高まってきた現在においても、考えるべき本質的な問題も含まれていると思われる。

先ず第一に、ヤコブスの一般的サインについての考え方は、現在のマニュアル・システム (Manual System) につながっているように思える。現在のトータル・コミュニケーション (Total Communication) の考え方の中には、大きく分けて二通りの考え方がある。一つは、伝統的サインをろう者の用いる一言語と考え、それをもとにして、英語という語を習得させていこうとするもので、バイリンガリズムにも通ずる考え方である。もう一つは、伝統的サインを認めてはいるが、教育の言語指導の中で占める比重は小さく、ろう教育において、最初からできるだけ、英語に沿った手話を工夫し、それを手段として、つまり手の記号、マニュアル・サインを用いていこうとするもので、これは、ここでいうヤコブスの考え方につながるものと考えられる。それに対し、前者の考え方は、ストーンの考え方にも通ずるものであろう。またピートの考え方は、両方に関係するものであり、ある点では後者の考え方にも通ずるものがある。しかしヤコブスの考え方にしても、ピートの考え方にしても、単純にどちらのやり方に通ずると言いきれない面が残る。

ヤコブスは、英語の語順に沿ったサインを考え、できるだけ英語のそのままをサインで表わすことを考えた。その際のサインは、ろう啞者にとっては欠くことのできない観念のない手であって、意味のある、適切に語の意味に合ったサインを作ることが必要とされていた。この点から、彼のいうサインは、現在いうところの伝統的サインを重んずることであり、その特徴をもとにしてサインを作りあげることであった。

H. P. ピートは、方法的サインと自然的サインをはっきりと分けており、方法的サインについては、「それは、決して会話で使われるものではない。教室において、文の分析、一語一語の書き取りの際用いられる」「それは、語順とはばあわせて用いられる。そして例えば、動詞、形容詞や、時制、格、などをはっきりさせるためのサインである」⁴⁰⁾と述べている。指導の初期において方法的サインが用いられ、生徒が文の基本構造を習得するのに

必要とされていた。彼は、サインが、観念の直接のにな手になるのであるが、同時にまた書きことばや指文字も、ろう啞者にとって、観念の直接のサイン (記号) となりうると主張した。それ故、ヤコブスの言う如く、生徒は、語や文そのものから学びうるのであり、語や句を説明するために、自然的、会話的サインを有効に使うことが必要であると考えた。

おわりに

当時のろう教育の目的の一つは、ろう啞者に書きことばを習得させることであった。

ヤコブスは、ろう啞者にとって欠くことのできない観念のない手と、サインを考えていた。そのサインは、①英語の語順に合わせたものであること ②意味のある、語を表わすのに適したサインであること、であった。彼は、ろう啞者が、われわれ聴者のように、英語そのもので考えるよう、そのときの音声の代わりとして、サインで英語そのものを考えさせることをねらった。

ピートは、ヤコブスの考えるようにサインを作ることには手間のかかることであり、サインのなかだちなしに語や句そのもので観念を生じさせようとした。説明のためには自然的サインがろう啞者の思考を養い、知識を伝えるために必要であり、方法的サインは、教室で文の構造を習得するのに使われるものであった。

註

- 1) 勿論、発音法についての知識も持ち合わせており、施設の中にも、中途失聴者や現在の難聴者にあたるものがいた。しかし殆んどのろう啞者に対する言語指導の方法については、手話が必要な手段であった。
- 2) 上野益雄：19世紀前半のアメリカ聾教育における手話法(1) 心身障害学研究第一巻、筑波大学に身障害学系において扱われている。
- 3) J. A. Jacobs ; On the disuse of natural signs in the instruction of the deaf mutes. Amer. Ann. Deaf, Vol. 5, No. 2, p. 9 b, 1853.
L. Ray ; On the proper use of signs in the instruction of the deaf and dumb. Amer. Ann. Deaf, Vol. 5, No. 1, p. 22, 1853.
- 4) ibid, p. 24.
- 5) 上野益雄；アメリカ聾教育におけるマニュアル体制の成立要因について、東京教育大学教育学部紀要 Vol. 21, 1975, において扱われている。

- 6) 口話法によるろう学校設立運動に際して大きな力となった S. G ハウの主張は、よりよき、アメリカ人としての社会の一員となることであった。「マサチューセッツ州慈善委員会第2・3年報」で彼の主張は展開されている。
- 7) L. Ray ; op. cit. p. 22.
- 8) L. Ray ; op. cit. p. 30.
- 9) L. Weld ; Suggestions on certain varieties of the language of signs, Proceedings of the 2nd convention, 1851.
H. P. Peet ; Element of the language of signs. Amer. Ann. Deaf. Vol. 5, No. 2, 1853.
- 10) J. A. Jacobs ; On the dis use of natural instruction of the deaf mutes. Amer. Ann. Deaf. Vol. 5, No. 2, pp. 103-106, 1853.
- 11) Proceedings of the 2nd convention of American Instructors of the deaf and dumb. p. 78.
- 12) *ibid*, p. 80.
- 13) *ibid*, p. 88.
- 14) *ibid*, p. 98.
- 15) *ibid*, p. 100.
- 16) J. A. Jacobs ; On the disuse of natural signs in the instruction of the deaf mutes. Amer. Ann. Deaf. Vol. 5, No. 2, p. 95, 1853.
- 17) J. A. Jacobs ; On the disuse of colloquial signs in the instruction of the deaf and dumb. Vol. VII, No. 2, p. 69. 1855.
- 18) J. A. Jacobs ; 1853, op. sit. p. 96.
- 19) *ibid*. p. 97.
- 20) H. P. Peet ; Review of the Arguments of Mr. Jacobs on methodical signs, Amer. Ann. Deaf, Vol. 11, No. 3, p. 139, 1859.
- 21) J. A. Jacobs ; 1853, op. sit. p. 103
- 22) J. A. Jacobs ; 1855, op. sit. pp. 71-72.
- 23) J. A. Jacobs ; 1853, op. sit. pp. 98-99.
- 24) J. A. Jacobs ; 1855, op. sit. p. 73.
- 25) Proceedings of 3rd Convention of American Instructors of Deaf and Dumb, p. 135.
- 26) J. A. Jacobs ; The relation of written words to signs, The same as their relation to spoken words. Amer. Ann. Deaf. Vol. XI, No. 2, p. 65, 1859.
- 27) H. P. Peet ; Words not "representatives" of signs, But of ideas. Amer. Ann. Deaf. Vol. XI, No. 1, p. 4, 1859.
- 28) J. A. Jacobs ; Misrepresentations corrected. Amer. Ann. Deaf, Vol. X, No. 2, p. 67, 1858.
- 29) 矢田部達郎 ; 思考心理学 I, p. 30, 培風館, 昭和23年, S. ヤコブスの論文には, ロック, ブラウンからの引用が多くなされている。しかし筆者には現在のところ, この概念論が, どのようにろう教育の言語理論とかかわっているのかよくわかっていない。今後の研究課題である。
- 30) Proceedings of the 2nd convention of American Instructors of the Deaf and Dumb. p. 88, 1851.
- 31) J. A. Jacobs ; 1855, op. sit. p. 70.
- 32) J. A. Jacobs ; 1853, op. sit. p. 108.
- 33) J. A. Jacobs ; 1855, op. sit. p. 80.
- 34) J. R. Burnet ; The necessity of methodical signs considered. Amer. Ann. Deaf. Vol. VII, No. 1, p. 2, 1855.
- 35) H. P. Peet b); 1859, op. sit. p. 131.
- 36) H. P. Peet ; 1859, op. sit. p. 3.
- 37) H. P. Peet ; 1859, op. sit. p. 4.
- 38) H. P. Peet ; 1859, op. sit. p. 6.
- 39) Proceedings of the 2nd convention of American Instructors of the Deaf and Dumb. p. 94, 1851.
- 40) H. P. Peet ; Elements of the language of signs Amer. Ann. Deaf. Vol. V. No. 2, p. 91, 1853.

Résumé

Manual Method of the Education for the Deaf and Dumb in America in 1850's.

Masuo Ueno

The purpose of this study is to make clear the manual methods of two instructors. They are J. A. Jacobs and H. P. Peet.

At that time, one of the main objects of the education for the deaf and dumb is the acquisition of written language.

J. A. Jacobs thought by signs the vehicle of ideas to deaf-mutes. That is,

- ① Signs as the means of interpreting written language, following the order of the words.
- ② Signs, naturally significant, or having their significance founded on nature analogies.

He thought that the written word is not Synonym of the sign, but the representative of the "idea" conveyed by the sign.

H. P. Peet regards the written word and significant sign by which it is interpreted to the deaf-mute, as synonyms, as two words in different language. He thought that the method of J. A. Jacobs' "signs in the order of the words" is difficult and slow to learn language, and under a skillful teacher, the pupil will learn to read and write without the medium of signs.

He argued that natural signs are necessary to cultivate the mind of the deaf-mute, and to give the information of knowledge for them.

In his opinion, methodical signs are used to acquire the structure of the sentence in the class room.